韓国・朝鮮時代の東闕における後苑の宙合楼区域の空間構成と植栽の特徴について

The Garden Structures and Plantings of Chuhapru area in the East Royal Palace of Choseon Dynasty, Korea

白 志星*

Ji-Soung BAIK

摘要：朝鮮時代の宮闕における宮苑の構成と庭園植栽の特徴について研究に当たり、東闕の後苑を取り上げ考究することにした。

後苑は自然の丘陵、山麓、溪流などを活かし、その一部を削平しながら殿屋や亭子を建て、あるいは溪流を堰止めて池園を造成するなど多彩な園圃の空間を構成している。しかし、このような手法は人工を加えながらもその庭造りにおいては周りの自然と調和させる様々な工夫がなされ、自然林と地形を巧みに利用した自然と人工の取り合わせの庭構成となっている。

後苑の空間造りににおいて植栽に限ってみると、自然の植生をそのままに活かし、自然林に囲まれた苑圃空間としたことが分かる。一方、翠塼の仕切りのデザイン手法は注目される。

研究の課題と方法

東闕は朝鮮時代の都である漢城にあった王宮の一つであり、離宮として造営された宮闕である。李朝期に造営された大規模な宮闕のうち、現存するいくつかの宮闕は極くわずかな部分を残すにすぎない。また、幸いに我々が見ることが出来る現存の殿屋にしても、大半は創建されてから戦乱などによる焼失、その後の重修や移建、または放置による毀損などによって様々な形態に変貌をとげてきたものである。

このことから比較的多くの殿屋が残っており、また、ほかの宮に比べて王が一番長く居住した東闕を選ぶことが有意義と言える。また東闕については、その宮闕の様子が詳しく描かれた『東闕図』が幸いに残されている。このような現状からここでは『東闕図』を手がかりとし、さらに『東闕図形』、『宮闕誌』、『実録』、『儀軌』などの史料を参照しつつ（この『東闕図』及び『東闕図形』（以下『図』及び『図形』とする）の書誌学的検討についてはすでに報告している¹⁾のでここでは省略する）、旧状を復元的に考察するとともに現状を実地調査する。また、これらのデータを総合して当時の宮闕における庭園の構成とそこにみられる植栽計画原理、植栽手法にみられる特性について考究するものである。

本論文ではこのような状況を踏まえ、李朝の宮闕における宮苑の構成と庭園植栽の特徴について研究するに当たり、東闕の後苑を取り上げ、そこでみる宮苑の構成とその植栽について考究することにした。

1. 後苑の構成

東闕における後苑は昌徳宮と昌慶宮の後方に位置しており、これらの王宮に関わる園圃、いわゆる後苑である。この後苑は王と王妃をはじめとする王家の人々に安らぎを与える逍遙、安息処としての園圃空間である、と同時に修学、修身など王の治者としての修養の場としての園圃でもある。また、ここは時に華やかな宴遊が行なわれる遊楽のための苑遊空間としても用いられた。

この後苑にはさらに宮守、直所、番所、庫などの役所が配置されており、宮闕はもとより後苑の防衛、防備、訓練などに関わる施設をも備えている。また皇壇や山壇にみるように神または祖先を祭る祭祀空間も設けられている。

この後苑を機能的な面からみると、後苑は遊楽、修養のための空間であると同時に、軍事や祭祀などといった実用的な面を合

せ持った空間として位置付けることができる。

2. 後苑の園圃空間

後苑は自然の丘陵、山麓、さらに溪流などを活かしながらその一部を削平し、殿屋や亭子を建て、あるいは溪流を堰止めて池を造成するなど多彩な園圃の空間を構成している。しかし、その手法においては多彩な人工を加えながら、またまわりの自然と調和させる修景が行われていると言える。したがって、後苑の殿屋や亭子での静的な観賞や遊楽に留まらず、自然の森のなかを楽しみながら逍遙するための空間としての機能が与えられている。

(1) 苑圃空間の空間構成からみた区分

後苑における園圃空間は、その庭の構成の特徴と地形的な特性によって谷間の源地形を基盤とし、池塘を穿ち周りに殿屋を配置する形で造営され、この後苑は宙合楼区域、魚水堂区域、尊徳亭区域、玉流川区域などの四つの区域に大きく分けられる。これらの四つの区域の内、今回は宙合楼区域について考察する。

(2) 宙合楼区域

宙合楼を北側の高い所に配置し、芙蓉亭とその蓮池を中心とするこの庭空間の全体的な地形は南、北、西側が丘陵に囲まれ、東側だけが開かれた地形となっている。この囲まれた地形の中央には切石護岸の方池が置かれ、方池の中央には中島が浮かぶた形をとっている（図-1参照、写真-1参照）。この庭は池での船遊、釣、賞花などを楽しみ、周りの建物からの眺望に重点が置かれた庭である。

写真-1 後苑の宙合楼空間

*韓国・全南大学校農科大学造景学科

図一 後苑の宙合楼区域（「東関図」・部分）

①宙合楼 ②書香閣 ③喜雨亭 ④喜雨門 ⑤千石亭 ⑥咲花堂 ⑦魚水門 ⑧芙蓉池 ⑨芙蓉亭 ⑩四井記碑閣

この区域には宙合楼をはじめ芙蓉亭、咲花堂、喜雨亭、千石亭、四井記碑閣などが池を中心に、そのまわりに建てられている。ここで芙蓉池周りの原風景を探索する意味で「宮闕志」²⁾をみると、この地域には世祖期(1455～1468)に井が作られていて、この池を中心にして、その周りに多くの建物が次々と建てられた。このことから考えると、この区域には池をモチーフにして、その池と関わる形で亭などの建物を配置するといった空間構成の基本が世祖期にすでにここになされているとみてよいであろう。つまり、池の水景を主とし、周りの地形を活かす形で建物を配置した空間造りがすでに始まっていたと言える。このことから宙合楼区域はいち早くから整備が行なわれた注目の場所と思われる。

以上のことからここでは宙合楼区域の変遷過程を踏まえ、空間構成上の特徴と、その庭空間に認められる植栽の特徴について検討する。

(i) 宙合楼

宙合楼は芙蓉池の北側の小高い丘陵の上に建てられた正面五間、側面四間、重層の構造を持つ南向きの楼亭様式の殿屋で、その上層は宙合楼、下層は宮中の貴重な書籍を保管する奎章閣となっている（図一参照）。

ここで注目したいのは、宙合楼が重層の構造をとっているため、特に上層の楼では高い視点が得られ、芙蓉池の庭空間をはじめとする周りの景色を眺める絶好の場所を提供していることである。このような建物の重層構造は立地的な要因も加わり、周りに広がる景観を眺めて楽しむことができる殿屋の構造をなしていると言える。

宙合楼の前庭と言える南側の傾斜地には四段の花階が造られている。この宙合楼の前面を飾る花階は、人工的かつ水平的な要素である花階の段を積み重ねることによって、建築的な視覚要素が強くなり、その上に建つ宙合楼をより高くそびえたつようにみせると共に宙合楼の荘厳さを感じさせる効果をうみだす役割を果たしている。特に、他には例のないこの前面の花階は風水思想で言う背山臨水の扱地のことから建物の後方に作られる一般の花階に比べ宙合楼の存在を引き立て、より積極的にその荘厳性を表わすと言う意味で、花階の修景手法として注目すべきものと言える。

宙合楼の前面の花階の最下段には魚水門が設けられており、それは一脚門の構造をなしている。魚水門の両側には着彩の扉をともなったトレリスが設けられている。魚水門の両側には東西に延びる長い翠塀が作られ、宙合楼空間と芙蓉池の庭空間を仕切っている。後苑における中心的な殿屋である宙合楼はその下層に奎章閣を設けていることから推察されるように王が政事を行なう場所であ

ある。さらに建物の構造からみると上層の楼様式は風流的な要素も持っている空間といえる。また書香閣も真殿や書庫として使われ、千石亭は別堂の一つで書斎などとして利用されたものであり、これらの建物はいずれも王の政事と関わりと同時に風流の要素も持つ殿屋である。これ

に対して芙蓉池と芙蓉亭は宴遊が行なわれる空間であり、いわば風流を楽しむ空間である。このようにいささか性格を異にするこれら二つの空間を時には仕切り、ときには連続した空間として一体化させるため、その施設として、上述の翠塀はまことに適切なものと言えるであろう。このようにみると両空間は宙合楼を中心とするいわゆる「オモテ(表)」の空間と芙蓉池を中心とする「ケ」の空間と位置つけることができる。したがって、この翠塀はこれらの両空間それぞれの機能面を重視した空間造りのうえで両空間を仕切る役割を持つ施設であると言える。それは仕切りの素材である植栽のうえからみると完全に遮断する硬い煉瓦の塀とは異なり、向こう側がある程度透けてみえるような植物を用いた柔らかな翠塀が、ここに導入された意味は極めて大きいとみてよいのではないと思われる。重ねて言えば両空間からの眺めに対して、この翠塀は空間を区切る硬い区切りとして働くよりは、柔らかな仕切りとして、みるものに捉えられる効果をもつ。後苑における宙合楼区域を考える時、両空間は時として一つの宴遊の空間として用いられる場合があり、また、時に両空間をそれぞれに分けて用いる場合があって、両空間の仕切りはその意味で柔らかなものでなくてはならない。翠塀がここに用いられるのは、このような理由に基づくものと思われる。

また、この翠塀は花階と平行する形で東西に延びており、この翠塀は花階に加わる形で宙合楼をより高く感じさせると同時に芙蓉亭側からみると、この翠塀を越えてみえる宙合楼はまるで雲の上に浮かぶ楼閣のようにみえる効果を産み出すものと思われる。特に芙蓉池での船遊の場合は視点がより低くなり、その効果がより大きく現われるものと思われる。実地に行なった現況調査では芙蓉亭の北窓（この北窓が開く部分は床が他より一段高くなっていて上位者のための空間であることを示す。）から宙合楼正面・上層の欄干の天端を見上げた時の視角は仰角9.7度、同じく魚水門の扁額をみた時の視角は仰角5.8度であった。これらのデータからも上述の考察が肯定できるであろう（図二参照、写真二参照）。

このような立面構成から、この翠塀を捉えるとき、それは宙合楼の高さをより強調する作意が込められたもので、植物を仕切り

図二 芙蓉亭から宙合楼までの断面図

写真-2 芙蓉亭から宙合楼をみる

として利用した巧みなデザインであると言える。

次に花階を除く宙合楼の平地における植栽についてみると、楼の後方、東と西に針葉樹の高木が一本ずつ対植の形で植栽されているのがみえる。この針葉樹の左右対植パターンは東関において外朝の内閣と玉堂、燕朝における東宮の修学空間である鶴禁、または後苑の

咲花堂前庭の科試の場である春塘臺空間においてもみられる。また今日でも奇傲軒の前庭にはイチイの対植を確認することができ、この奇傲軒は王世子の翼宗が読書を楽しんだ所である。これらの空間は全て王や東宮あるいは学者と深く関わる学問の場であることに注目したい。上述の所でみられる、この左右対称の配植パターンは学問に関わる空間になされた植栽とみることもできよう。

『図』にみる宙合楼空間の翠塀は咲花堂の北側の塀の所から西に延び、ほぼ芙蓉池の西岸に達した地点で矩折れし、北行して、まもなく再び西に延び、西側の煉瓦塀に達する直線的な形をとっている。

ここで現在の宙合楼の花階の植栽状況を見るとイブキの外に14種類の樹木が植栽されている。この植栽状況から、『図』の翠塀のある部分の植栽に注目すると、その中で特にイチイの分布に注目してみると『図』でみる翠塀のあった所を形とるようにして分布していることが分かる(図-3参照)。つまり、このイチイは宙合楼前面の最下段の花階に列植の形で分布している。また、花階の最上段の書香閣の西側で、その列植を確認することができる。この最上段のイチイの列植は『図』にみる書香閣の西側の翠塀に当たるものとみられる。そして最下段と最上段を繋ぐようにして二段にイチイが配植されている。さらに現地での調査では花階の一段目には5本、二段目には2本、四段目には1本のイチイの切り株を新たに見つけることができた。これらの切り株の組織を電子顕微鏡の分析を行なった結果、全てがイチイであることが判明され、イチイの列植を明らかにしてくれるものである。このイチイ植栽検討からおよそ『図』に描かれている翠塀の形を見いだすことができる。特に一段目と二段目のイチイの切り株の中では翠塀が北に矩折れする部分のものであり、『図』にみる翠塀の実体をうかがわせるものである。したがって、この検討が正しいとすれば『図』にみる翠塀はその樹種をイチイと推定することができると同時に、現在のイチイの植栽を『図』にみる翠塀の名残

図-3 宙合楼前面 花階のイチイ植栽現況図 (●は現在残っているイチイの切り株)

として理解しうるのではないだろうかと思われる。この点についてはもう一つ、喜雨亭の後方の喜雨門の所に描かれている翠塀(図-1参照)においても、現在、イチイの植えられているのが確認できる。この喜雨亭後方のイチイの植栽もまた、前述のイチイの翠塀と関連して考えるうえでは貴重な手掛かりとなる。

(ii) 芙蓉池

広々とした水面を持つ芙蓉池は芙蓉亭庭空間の中心部を占めており、芙蓉池は切石護岸となっており、その平面形は方形の、いわゆる方池であり、池のほぼ中央には一個の中島がある。この中島は『図』をみるかぎり切石護岸の六角で、また二段の構造をとり、その上段には手摺が付けられていることから、かなり建築的(人工的)な雰囲気を持つ島と言える。手摺で囲まれた中には松とみられる一本の樹木が大切に植えられている(図-1参照)。しかし、『図形』をみると、この中島は円島として書かれている(図-4参照)。「宮闕志」³⁾の咲花堂条の肅宗十八年(1692)には「…西有蓮池中有一島為有清暑亭」とあることから中島に亭子が建てられた時期があったことが分かる。また、それについて「宮闕志」の咲花堂条に「…類ひ仍廢壬申改築小島…」とあり、中島の改築した事実がある。このように改築などにより中島の形に変遷があったことを伺わせる。ただ、この時期の池の様子は方池であったとは言いきれない。しかし「宮闕志」⁴⁾の澤水齋条には「吾齋新様佳登此愛幽静前面臨方塘傍邊對古井」とあることから、少なくとも澤水齋が建てられた肅宗三十三年(1707)には方池の姿がみられたことが分かる。

芙蓉池での船遊については「宮闕志」⁵⁾の喜雨亭条に記されている肅宗の詠った詩によれば「太液龍舟駕息波琅然清唱採蓮歌…」とあり、この芙蓉池は中国の禁苑の中の太液池になぞらえており、豪華な龍舟を浮かべ、歌を詠いながら船遊を楽しむ風流の場であった。

これについて「宮闕志」の喜雨亭条に「…無一事間投竿竹釣魚多」とあることから、この芙蓉池は王が日常の政治のことから離れ、悠悠閑閑と釣りを楽しむ遊喜の場として使われたことが分かる。また「宮闕志」の澤水齋条には「太液清波裡何多白玉簪欲知奇絶處月色満池心」とあり、この芙蓉池空間は夜の月を楽しむ望月の宴が行なわれる場所でもあった。

このような風流を楽しんだ水空間である芙蓉池は、その周りの

図-4 宙合楼と芙蓉亭の関係(『東関図形』・部分)

空間構成を四方が圍繞された空間に造りあげることによって、こぢんまりとした静かな後苑の宴遊が行なわれる空間として位置づけられる所である。つまり、丘陵の上にそびえたつ宙合楼とその前面の花階、それに咲花堂とその南行閣の人工的な要素によって池の北と東側が囲まれる形となっている。一方、池の南と西側は自然の丘陵が囲うように形造っている。このようにみる時、宙合楼前面の花階は、この芙蓉池の北側を限る空間の決め手となる要素である。さらに花階上の翠塀は前にも述べたように、この空間において非常に適した仕切りの手法として導入されているものである。

このようにみると、芙蓉池空間はまわりの殿屋、地形などに囲まれた非常に安定感のある空間として捉えているとともに、この静かな後苑の雰囲気演出する中で船遊、釣り、望月といった風流を楽しんだ優雅な宴遊の場であると言える。

(iii) 芙蓉亭

芙蓉亭は芙蓉池の南岸に建てられた亭子である。芙蓉亭は正面三間、側面三間の亜の字形に似た特異な間取りの構造の平面を持つ亭子である(図-1, 4参照)。亭子の周りの縁先には豪華な装飾が施された欄干を巡らし気品の溢れる建物となっている。北側の二本の高い礎石は池の中に建てられ、これによって建物の一部が池にのりだす形となり、したがって北側の廳の部分は水面に浮かぶ姿となっていて、芙蓉池側から見て、この亭がさながら水に浮かぶ亭として鑑賞されるといった見事な演出をみせている。建物の構造においても池中に乗り出している部分だけが一段と高く作られ、亭子の内での視点の変化をもたらしている。これらの建物の構造は、水景に溶け込むようなデザイン性がうかがえるものである。また、この建物は自然を背景として建てられていることから際だてみえる存在となる。そのために芙蓉亭は繊細を極めた美しい亭子として作り上げ、周りとは一層対比させる形で配置されている(写真-3参照)。

芙蓉亭から芙蓉池への眺望は前面に広がる水面、そして中島、向こう岸の宙合楼をはじめとする殿屋群の景観、さらに水面に映る周りの景色などが加わり、目いっぱいの景観となる。この芙蓉池の周りについてみると、前にも述べたように東と北側は殿屋によって囲まれており、西と南側は自然の丘陵地によって囲まれている。これは言い換えれば前者の人工的な要素の強い空間造りと、後者の自然性豊かな空間造り、すなわち二つの異なった囲いによっ

写真-3 後苑の芙蓉亭

て囲まれている。よって、この庭空間は自然と人工を対比させる手法を用いた空間造りをみせていると言える。

芙蓉池の東と北側の空間は丘陵を削り取って地盤を作り上げたもので、後苑に限ってみれば、他に類例をみることのできないほどの大胆な手法であると思われる。このように大胆に人工を取り入れることによって自然のなかで際立ち、強く印象づける景観となる一方、これに対して花階などの植栽を配置することによって周りとの調和を図るものと思われる。

これに対して西と南側は丘陵の自然の植栽地になっており、その中の芙蓉亭は自然性豊かな背景を持つことによって自然に解けもむような形で自然と一体となる柔らかな景観をみせている。この丘陵の植栽を背景にした芙蓉亭の姿は、この芙蓉池の庭空間において眺めのポイントとなる。

この庭空間における景観構造上の特異なことは南北一直線の強い軸を持っていることである。このことは『図形』の平面図に克明に現われている(図-4参照)。つまり宙合楼、魚水門、中島、そして芙蓉亭を結ぶ軸である(写真-2参照)。しかし、この空間にある建物は同一時期に建てられたものではなく、さらにこの空間が起伏のある自然地形であるため軸を設けることは容易ではないと判断される。しかしながらこの庭空間には上述の軸を設けることにより景観の上で一つの秩序をもたらし、景観要素を連結させ、全体的に統一感を産み出すものとなる。この軸線を用いた高度な空間造りの手法は同一空間として認識させるものと言える。

引用及び参考文献

1) 白 志星・藤井 英二郎・仲 隆裕・浅野 二郎(1992): 韓国・李朝の東闕における庭園植栽について: 千葉大学園芸学部学術報告 第46号, 203-	2) 「宮闕志」(三) 昌徳宮; 東京大学図書館所蔵	4) 「宮闕志」(三) 昌徳宮, 澤水齋条; 東京大学図書館所蔵
3) 「宮闕志」(三) 昌徳宮, 咲花堂条; 東京大学図書館所蔵	5) 「宮闕志」(三) 昌徳宮, 喜雨亭条; 東京大学図書館所蔵	

Summary : This garden is located behind of both Changdok and Changkyong Palaces and considered as a secret garden. It was used as a private resting and entertainment space for the king and his family. This place was also used at times as place for studying and self controlling place for the king as a governor of the country. In addition, it was used as a place for parties and receptions. The buildings and structures in this garden are in harmony with the natural flow and by not breaking the natural beauty. The pond and pavilions were built only in harmony with the natural surroundings.

Chuhapru area can be divided into the space for political affairs being the nucleus Chuhapru and the space for entertainment being the nucleus Puyongjong. This building is built for political affairs and entertainment, which is located in the highest place where it has a remarkable viewsight and dignity. Puyong pond is the central place of this area where people can enjoy taste such as boating, fishing, and enjoy looking at the moon, ect. Puyongjong that is situated in the water space is the most luxurious pavilion which is very artificially.

Hwagye(terraced flower bed) is usually located in the back of the building, but Chuhapru situated in front of the building can make this building remarkable. Chwibyeong(hedge) made of plant material is a fence which is mixed well with surroundings. The plant fence gives a soft impression in contradistinction to stone fence. Chwibyeong is used for the space of entertainment.